質問紙による大学生のEQ診断に関する実証的研究

Emotional Intelligence Quotient Assessment through Questionnaire Survey in Undergraduate Education

谷口満紀・笠原智穂・卜部匡司・石井拓

分野：教育学、高等教育
キーワード：EQ教育、教育評価

はじめに

本稿の目的は、本学学生のEQについて、とりわけ新入生の社会的スキルに焦点を当てて、その性向を明らかにすることである。周知のとおり、EQ（Emotional Intelligence Quotient）とは、いわば「心の知能指数」と呼ばれるものであり（ゴールマン［1998：77］）、いわゆる知能の高低を示した従来の知能指数（IQ：Intelligence Quotient）との対比において説明される概念である。

本学では2007年度より「EQ教育プログラム」を導入し、学生たちの「人間力（＝社会を構成し運営するとともに、自立した一人の人間として力強く生きていく力）」の育成に取り組んでいる。この取り組みの中で、われわれは数々の難題に直面しているが（川内ほか［2010：149-151］）、本学独自の「EQ教育プログラム」の開発に寄与すべく、これまでの研究では主として、EQの内容をどう規定するか（卜部［2008］）、さらには、学生たちのEQをどう測定するか（川内ほか［2010］）についての研究に取り組んできた。そうすることで、本学に在籍する学生全体のEQに関する傾向を明らかにしてきた。

これらを踏まえながら、次に取り組むべき研究は、「EQ教育プログラム」開始時点での学生のEQの測定である。すなわち、本学の学生が入学時にどの程度のEQが備わっているのかについて診断することである。というのは、この作業があって初めて、本学の「EQ教育プログラム」で学生のEQが成長したかどうかがわかるようになるためである。実際、近年の若者たちはコミュニ

ケーション能力や社会性などが低下しているといわれているが、本当にそうなのだろうか。また本学のように、入試合否判定ラインが不明瞭で入試偏差値が低いとされる、いわゆる「Fランク（BFランク）」に位置づけられる大学の学生は、偏差値が大きく異なるような大学の学生と比較した場合、社会的スキルの分布においても大きな違いが見られるのだろうか。

本稿ではこれらの問いに答えるべく、本学新入生の入学時のEQについて、その性向を明らかにする。手がかりとするのは「KiSS-18（Kikuchi's Scale of Social Skills: 18 items）」である。「KiSS-18」は、社会的スキルを総体として測定する尺度であり（菊池［2007］）、数多くの研究者や実践家によって活用されてきたものである。

以下の本論では、まず新入生のEQ診断のため実施した「KiSS-18」の質問紙調査について、その概要を述べる。次に、質問紙調査で得られた本学学生（留学生を除く）の得点分布を、「KiSS-18」における大学生の標準化データの得点分布と比較し、平均値の差の検定を行う。また、本調査の信頼性を確認するために、本調査で得られたデータを因子分析することで因子の構造を分析する。そして最後に、これらの分析結果を踏まえて若干の考察を行う。

Ⅰ．質問紙調査の概要

1．調査の尺度

本調査では、社会的スキルを測定するための「KiSS-18」という尺度が用いられた（菊池［2007：29］）。「KiSS-18」は、例えば、「相手が怒っているときに、うまくなだめることができますか」や「他人が話しているところに、気軽に参加できますか」など、社会的スキルに関する18の質問項目に対して、それぞれ5件法（「いつもそうだ（5点）」～「いつもそうでない（1点）」）で回答するものである。そこでは、大学生をはじめ多くの調査において3つの下位尺度（問題解決のスキル、トラブル処理のスキル、コミュニケーションのスキル）が抽出されている（表1参照）。

表1：「KiSS-18」の下位尺度と項目事例

下位尺度	項目事例
問題解決のスキル（6項目）	「他人を助けることを、上手にやれますか」 「相手が怒っているときに、うまくなだめることができますか」など
トラブル処理のスキル（5項目）	「まわりの人たちとの間でトラブルが起きても、それを上手に処理できますか」 「あちこちから矛盾した話が伝わってきても、うまく処理できますか」など
コミュニケーションのスキル（7項目）	「知らない人とでも、すぐに会話が始められますか」 「他人が話しているところに、気軽に参加できますか」など

菊池（2007）より筆者作成

2．調査の対象

この「KiSS-18」の18項目を手がかりに、本学では入学式から4日後（2011年4月4日）に、新入生合宿「EQトレーニングⅠ」に参加した273名の参加者全員を対象に、トレーニングを行う前に質問紙調査を実施した。さらに具体的に言えば、回答者の属性は、以下の図のようになっている。

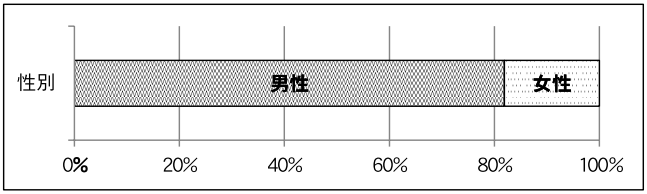

図1：回答者の属性（性別）

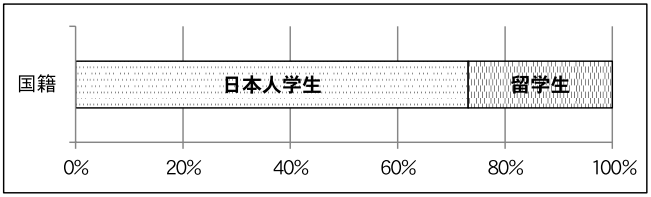

図2：回答者の属性（国籍）

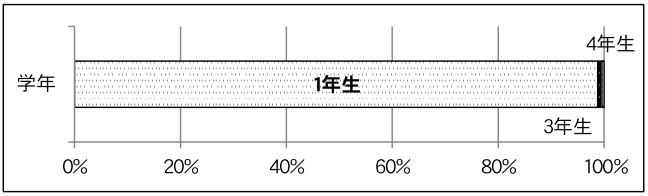

図３：回答者の属性（学年）

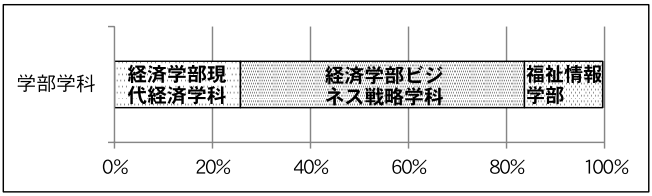

図４：回答者の属性（学部学科）

まず性別では、男子の数が女子の数に比べて圧倒的に多い。また、国籍別で見れば、日本人学生が約3/4で、留学生が1/4の割合である。さらに学年別では、回答者のほとんどが１年生であり、これは新入生対象の合宿であるため、当然のことである。なお、学部学科別で見れば、経済学部ビジネス戦略学科の学生が全体の約６割に及ぶ。

Ⅱ．得点分布の比較

社会的スキルを測定する「KiSS-18」は、わが国の社会を前提に設計されているため、本稿では、ひとまず留学生を分析の対象から外し、以下では日本人学生のデータに限定して分析を行う。

１．得点分布の比較

まず本学男子学生の得点分布を、「KiSS-18」の大学生男子の標準化データの得点分布と比較してみると、以下の図５のグラフのように示される。標準化データは、岩手県立大学、岩手大学、駒澤大学などで収集されたデータ（403名分）に基づくものである。得点は、18～90点（「全18項目×１点」～「全

18項目×5点」）に分布が可能であり、パーセンタイル値は、それ以下の得点に全体の何パーセントが入るかを示したものである（菊池［2007：Ⅵ］）。

グラフによれば、徳山大学の男子学生は、そのデータが標準化データよりもパーセンタイル値が高いことから、平均的な大学生よりも社会的スキルが高いように見える。

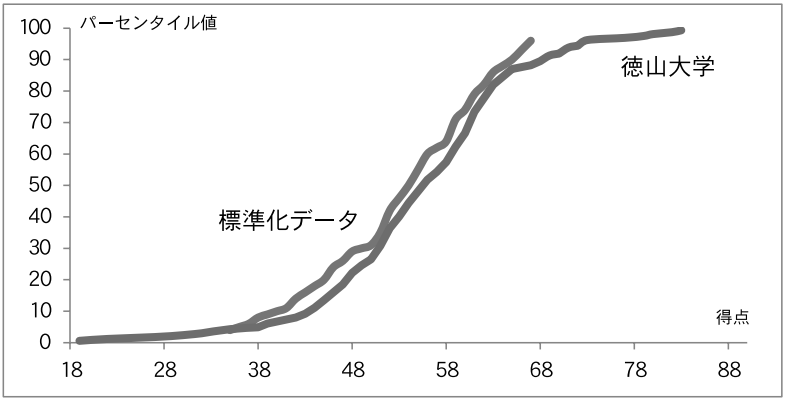

図5：得点分布の比較（男子学生）

次に、本学女子学生の得点分布を、「KiSS-18」の大学生女子の標準化データの得点分布（565名分）と比較してみると、以下の図6のグラフのように示される。

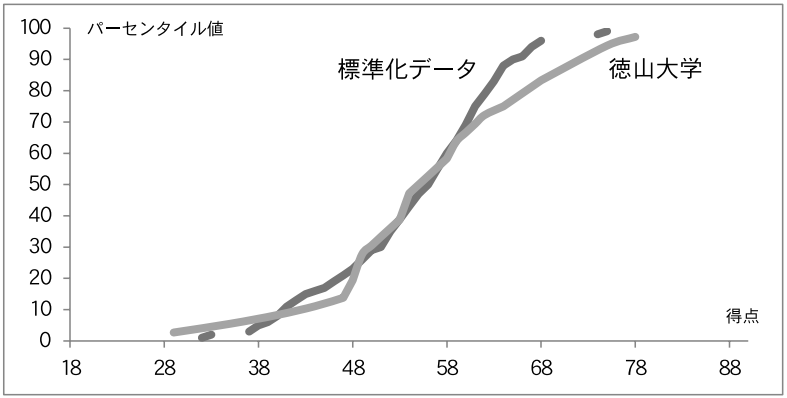

図6：得点分布の比較（女子学生）

グラフからもわかるように、徳山大学の女子学生は、そのデータが標準化データとほぼ重なり合っていることから、ほぼ平均的な大学生が持っている程度の社会的スキルが備わっていると考えられる。

2．平均値の差の検定

徳山大学の学生のデータと「KiSS-18」の大学生の標準化データとの比較において、女子学生については、本学の女子学生はほぼ標準化データと同様の傾向を示している。他方、男子学生については、本学の学生は平均的な大学生よりも社会的スキルが高いことが判明した。

そこで以下では、本学の学生のデータの平均が、標準化データの平均と比べて統計的に有意な差が見られるかどうか検証する。実際、平均値を比較してみると（表2参照）、男子学生の平均値は「$p>0.025$」水準の t 検定（両側検定）において有意ではなかったが、有意な傾向が見られた。すなわち、本学の男子学生の社会的スキルは、他大学（標準化データ）と比べて必ずしも統計的に有意に高いというわけではないが、平均よりほんの少しは社会的スキルが高いと言うことができる。

表2：平均値の比較

		男子	女子
標準化データ	サンプル数	403	565
	平均	53.08	54.35
	標準偏差	10.13	9.36
徳山大学	サンプル数	161	35
	平均	54.86	55.46
	標準偏差	10.53	10.41
t 値		1.87	0.67
p 値		0.031	0.250
自由度		562	598

Ⅲ．因子構造の検討

さらに、本調査で得られたデータから因子分析を行うと、日本人学生男女のデータからは、次のような4因子が抽出された（表3参照）。従来の「KiSS-18」の研究からは、因子分析によって、「対人積極スキル」、「和解スキル」、「対処行動スキル」、「他者理解スキル」の4因子や、「会話スキル」、「葛藤処理スキル」、「自立スキル」、「援助／融和スキル」の4因子が、それぞれ抽出されている（菊池［2007：125-126］）。これらの4因子は、以下の4因子にほぼ対応しているように見える。

表3：回転後の因子行列（日本人学生男女）a

	因子			
	1	2	3	4
他人と話していて、あまり会話が途切れないほうですか	.750	.160	.055	.067
他人が話しているところに、気軽に参加できますか	.683	.230	.131	.174
知らない人とでも、すぐに会話が始められますか	.605	.203	.218	.038
自分の感情や気持ちを素直に表現できますか	.526	.233	.080	.329
初対面の人に、自己紹介が上手にできますか	.507	.241	.163	.320
他人にやってもらいたいことを、うまく指示することができますか	.504	.205	.355	.140
他人を助けることを、上手にやれますか	.439	.335	.276	.112
まわりの人たちとの間でトラブルが起きても、それを上手に処理できますか	.378	.734	.105	.049
相手が怒っているときに、うまくなだめることができますか	.336	.556	.190	.228
こわさや恐ろしさを感じたときに、それをうまく処理できますか	.193	.556	.144	.128
あちこちから矛盾した話が伝わってきても、うまく処理できますか	.101	.532	.219	.257
相手から非難されたときにも、それをうまく片付けることができますか	.283	.482	.343	.275
気まずいことがあった相手と、上手に和解できますか	.383	.417	.107	.159
仕事の上で、どこに問題があるかすぐにみつけることができますか	.084	.271	.756	-.108
仕事をするときに、なにをどうやったらよいか決められますか	.223	.150	.579	.227
仕事の目標を立てるのに、あまり困難を感じないほうですか	.229	.099	.518	.388
何か失敗したときに、すぐに謝ることができますか	.175	.229	.047	.583
まわりの人たちが自分とは違った考えをもっていても、うまくやっていけますか	.129	.405	.287	.416

因子抽出法：主因子法
回転法：Kaiserの正規化を伴うバリマックス法
a. 6回の反復で回転が収束しました。

なお、先行研究（菊池［2007］）では男子学生に限定して因子分析および3因子の抽出が行われていたため、本調査においても大学生男子のデータだけを用いて因子分析を行ってみた。その結果、次のような3つの因子が抽出された（表4参照）。これらの3因子は、それぞれ従来の「KiSS-18」の下位尺度に対応していると言えよう。すなわち、第1の因子が「トラブル処理のスキル」、第2の

表４：回転後の因子行列（男子学生）a

	因子		
	1	2	3
まわりの人たちとの間でトラブルが起きても、それを上手に処理できますか	.775	.353	.078
相手が怒っているときに、うまくなだめることができますか	.608	.267	.240
こわさや恐ろしさを感じたときに、それをうまく処理できますか	.568	.204	.179
あちこちから矛盾した話が伝わってきても、うまく処理できますか	.557	.141	.277
まわりの人たちが自分とは違った考えをもっていても、うまくやっていけますか	.520	.079	.367
相手から非難されたときにも、それをうまく片付けることができますか	.498	.246	.407
何か失敗したときに、すぐに謝ることができますか	.380	.254	.203
他人と話していて、あまり会話が途切れないほうですか	.120	.731	.072
他人が話しているところに、気軽に参加できますか	.267	.656	.152
知らない人とでも、すぐに会話が始められますか	.169	.617	.234
初対面の人に、自己紹介が上手にできますか	.241	.551	.299
自分の感情や気持ちを素直に表現できますか	.315	.535	.172
他人を助けることを、上手にやれますか	.358	.411	.328
気まずいことがあった相手と、上手に和解できますか	.400	.402	.094
仕事をするときに、なにをどうやったらよいか決められますか	.183	.236	.640
仕事の目標を立てるのに、あまり困難を感じないほうですか	.197	.185	.621
仕事の上で、どこに問題があるかすぐにみつけることができますか	.217	.090	.587
他人にやってもらいたいことを、うまく指示することができますか	.221	.428	.450

因子抽出法：主因子法
回転法：Kaiserの正規化を伴うバリマックス法
a. 7回の反復で回転が収束しました。

因子が「コミュニケーションのスキル」、第3の因子が「問題解決のスキル」として、それぞれ3つの下位尺度に対応している。

これらの結果から「KiSS-18」を用いた本調査の信頼性についても、ある程度は確保されたと言えよう。

おわりに

本稿では、徳山大学のEQについて、特に新入生の社会的スキルに焦点を当てて、その性向を明らかにすべく考察を進めてきた。近年の若者たちは、世間で言われるほど本当にコミュニケーション能力や社会性などが低下しているのだろうか。また入試合否判定ラインが不明瞭で入試偏差値が低い大学の学生は、社会的スキルにおいてもその優劣が見られるのだろうか。

本調査による分析結果からは、むしろ逆の事実が浮かび上がってくる。すなわち、徳山大学の学生データを、本学とは入試偏差値が大きく異なる他大学の

学生データ（標準化データ）と比較してみたとき、徳山大学の学生の社会的スキルは、少なくとも入学時点においては、平均的な大学生よりもやや少し高いということが明らかになった。逆の言い方をすれば、徳山大学の学生の社会的スキルは、他の大学生と同様に標準的なものであると結論づけることができる。

他方、「KiSS-18」における標準化データは、約20年にわたり用いられてきたものであり、このデータとの比較においてさらにわかるのは、近年の若者のコミュニケーション能力や社会性が過去に比べて低下しているとは必ずしも言えないということである。

なお、「KiSS-18」において測定されるのは、あくまで社会的スキルをめぐる自己評価であるため、今後は他者評価も含めた包括的なEQ測定ツールの開発が望まれる。また、本稿では日本人学生に限定して分析を行ったため、留学生の社会的スキルに関するデータ分析までは扱うことができなかった。これらについては、今後の課題としたい。

【参考文献】

1. 川内健悟、大西智子、松尾真一郎、卜部匡司「大学生のEQ教育における評価方法に関する基礎的研究」徳山大学経済学会『徳山大学論叢』第71号、2010年、149-168頁。
2. 菊池章夫編著『社会的スキルを測る：KiSS-18ハンドブック』川島書店、2007年。
3. ダニエル・ゴールマン著、土屋京子訳『EQ－こころの知能指数』講談社文庫、1998年。
4. 卜部匡司「大学におけるEQ教育に関する理論的考察」徳山大学経済学会『徳山大学論叢』第67号、2008年、55-69頁。